

幕末の儒者

新居水竹

嘉桐館

新居水竹

▲嘉桐館(塾の扁額)大滝家文書

【展示期間】平成17年2月1日(火)  
~4月24日(日)

【開館時間】午前9時30分~午後5時

【ところ】徳島県立文書館 2階展示室

- 展示解説 平成17年2月27日(日)・4月3日(日)
- 内容 文書館担当職員による解説等
- ところ 文書館 2階講座室・展示室

▲読書をする新居水竹 祖上氏提供

入場  
無料



# 新居水竹について

新居水竹は、諱は謙、字は受益、幼名は百太郎、長じて与一助と称し水竹又は成園と号した。文化十（一八一三）年四月十五日富田の中屋敷で生まれ、明治三（一八七〇）年九月十五日に没す。

父は新居春洋（諱は謨、字は子彰、通称米之丞、春洋又は雙清堂と号す）。春洋は寛政四（一七九二）年生まれ、藩料理方で文政十（一八二七）年から東殿奥目付を兼ねた。小奉行格三人扶持支配七石であった。春洋は学を好み、漢詩を能くし、書が巧みであったといい、学ぶ人も多かったという。天保九（一八三八）年六月二十八日憤慨するところがあり、遺書を残し佐古の大安寺で自殺をした。享年四十七歳であった。

水竹はこの父に学び、さらに徳島の儒者である柴野碧海・那波鶴峰・岩本賛庵・鉄復堂などに学んだ。天保九年八月に家職を継ぎ、同十四（二八四三）年十一月隠居した十二代藩主斉昌の侍臣となる。弘化三年受弘方（料理方）となる。嘉永三年（二八五〇）斉昌に従って江戸に行き、古賀謹堂に学ぶ。同年十一月日帳格・庭方に出世、十二月には家宅を

出来島に賜った。安政四（一八五七）年病を得て、五月より京都で養生し、その間伊勢等に遊び京都・畿内の諸名士と交わりを持ち七月帰国した。この時の遊歴の日記が『塞馬録』である。

安政六（一八五九）年正月十三代藩主斉裕に経を講じ、中小姓に出世した。この時斉昌から戯れで「庭の唐人（学者）が座の唐人となれり」といわれたといい、斉昌の信任が非常に厚かった。

万延元（一八六〇）年九月世子茂韶の侍講となり、文久元（一八六一）年五月に藩の儒員となり、同年九月茂韶に従い江戸に行き、江戸の藩校長久館教授となった。同二年から三年にかけて藩命により京都に何度も入り時事を尽くし同年閏八月には大小姓となつてゐる。八月十八日の政変により失脚し、池田村郷学校の教授となる。明治元（一八六八）年四月池田村郷学校教授の任を解かれる。

十四代藩主茂韶は同二年正月西の丸に長久館という総合学校を建設。水竹はその教授となった。五月には金陵会議（四国会議）へ藩命により参加する。八月には茂韶夫人斐の侍講

を兼ね、長久館学頭となり、三等士実奉七十石を与えられた。版籍奉還に伴う稲田家の分藩運動に怒り、同三年明治政府に直訴しようとして同志の藩士と共に東京へ登ったが、その内八人が脱歸し兵を挙げ、五月十三日に洲本などを襲う庚午事変を起す。水竹は九月十五日東京白金の徳島藩邸で切腹した。遺骸は東京三田の明王院に葬られ、墓は二軒屋の潮見寺にある。刊本に二男の新居敦二郎が編んだ『水竹居詩抄』がある。

## ●新居水竹関係年表

和 暦	月 日	内 容
文化10年(1813)	4月15日	新居春洋の長子として、富田中屋敷にて誕生。
文政9年(1826)	8月	料理方見習になる(天保8年に三口俸賜る)。
天保8年(1837)	冬	京都に遊ぶ。大坂、篠崎小竹に学ぶ。
天保9年(1838)	8月	6月、父自刃により家職を継ぐ(西の丸)。
天保14年(1843)		西の丸隠居太公斉昌の専属侍臣となる。
弘化3年(1846)		「水竹居日記」始まる(弘化3年～明治3年5月1日まで25年間)。
嘉永3年(1850)	3月28日	峻陵太公(斉昌)に従い上京し、昌平塾などで学ぶ。
	11月	10月帰国後日帳格庭方になり、受弘方奉行(弘化3年10月～)を兼ねる。
	12月	出来島に邸を賜る(後に、ここに小心塾ができる)。
安政4年(1857)	5月	病氣、伊勢近畿に遊ぶ(貫名海屋、家里松島、斉藤拙堂、土居馨牙)。「塞馬録」なる。
安政6年(1859)	正月	斉裕公に経を講じて中小姓になり(禄一石加増)、大小姓の班に属する。
万延元年(1860)	9月	世子茂韶に経を講じる。
文久元年(1861)	5月	儒者に選ばれる(職俸一口、二石)。世子侍講を命じられる。
	8月	三野(芝生、勢力、加茂野宮)の三村用水(風呂谷用水)碑が建てられる。
	9月23日	世子に随い上京した時に、長久館(江戸八丁堀邸内、安政3年に完成)教授となる。
文久2年(1862)		この頃、度々京都に出、尊王の立場で活動する。
	閏8月27日	大小姓格になる。
文久3年(1863)	8月18日	八月十八日の政変起こり、翌19日水竹は阿波に掃される。
	12月21日	三好郡池田村教授を命ぜられるが、水竹自身の病氣、水竹夫人の出産・病気で池田に行けず(元治元年11月7日夫人死亡)。
慶応元年(1865)	5月	水竹池田村教授として池田へ行く。
慶応3年(1867)	3月	池田へ行く。
	5月	水竹、猪尻村武田宗作(応呼龍)等の墓碑を作成する。
	9月	池田へ行く。
明治元年(1868)	4月11日	池田村教授の任を解かれる(藩政に復帰)。
明治2年(1869)	正月	正月17日に寺島学問所を移し西の丸長久館(徳島)が始まり、長久館教授(後に教授頭)に任ぜられる(～明治4年7月薩藩置県に伴い廃校)。
	3月10日	土佐藩より四国会議(金陵会議)誘説の使者來徳(9日)あり。水竹ら面会して同意。
	4月10日	第一回金陵会議が行われる(水竹、同5月の会議に出席)。
	8月	7月の禄制の改革に伴い、水竹総学司学頭になる。
明治3年(1870)	5月13日	庚午事変(徳島藩士が洲本を襲撃、稲田家臣に多数の死傷者あり)。
	9月15日	東京芝白金の藩邸で切腹。



『水竹居詩抄』古川家文書

## ごあいさつ

第二十九回企画展は「幕末の儒者 新居水竹」と題して、展示としては数年ぶりに一人の人物に焦点をあて取り上げました。新居水竹は、徳島藩維新史の激動期を象徴する庚午事変（稲田騒動）に関わり、事変の「精神的支柱」として悲劇的な最期（わが国刑法史上最後の切腹）を遂げた人物として知られていますが、今回の展示では、幕末の徳島藩を代表する儒学者である彼の姿を様々な資料を通して紹介しています。

第一は、藩主の侍読や藩校長久館の学頭などを務め、学者そして教育者として、第二は、波乱の幕末藩政のなかで果たした役割、第三は、池田郷学校に務める傍ら、藩西部の人々との深い交流を持ちながら、藩儒として幅広い活動を行ったことなど、人間新居水竹の多様な側面に迫り浮かび上がらせています。水竹は父親である春洋、さらに藩儒であった柴野碧海・那波鶴峰・岩本贅庵・鉄復堂などに学問、詩書を学び、天保十四（一八四三）年隠居した十二代藩主蜂須賀斉昌の侍臣となり、嘉永三（一八五〇）年には江戸に上り古賀謹堂に学びました。その後、持病が悪化し休暇をもらい病氣回復のため、京都で養生生活を送りました。この旅の様子は『塞馬録』に書かれており、竹治貞夫氏により、徳島文理大学論叢に「新居水竹著『塞馬録』訳注」としてまとめられています。それによると「京都のみならず伊勢まで足を運び、多くの人と会い、その中には、藤井藍田、広瀬旭莊、長三洲、頼三樹三郎、家里松疇、僧月性ら尊王攘夷派の人々が含まれ、後に京都で勤王派として活躍をする素地を作った」とあります。このように彼は、弘化三（一八四六）年から明治三（一八七〇）年まで約二五年間に詳細な日記を残しており、その内容は学事のみならず政治にも関わった徳島藩の儒者が残した資料であり、幕末における阿波の状況を知るには一級の資料であるといえます。

文久元（一八六一）年には、藩の儒官となり、江戸の藩校長久館の教授となっていた水竹は、藩命により京都に入りましたが、阿波出身の尊攘派

の志士中島錫胤や公家、また藩に対して尊攘派としての献策を繰り返していた竹澤寛三郎らと交わり緊密な関係を示しています。同三（一八六三）年、中島錫胤らが関係した等持院足利木像梟首事件や八月十八日の政変が起ると免職されて辺地教育強化の名目で三好郡池田村に左遷されています。明治元（一八六八）年、徳島に呼び戻されて再び藩政に参画し、翌年、開設された長久館の教授に就任しています。水竹は池田村に赴いたとき、交友関係だけではなく、儒学者として素朴に尊王攘夷の心情を吐露し持ち続けていたことは彼のしたためた書でも推察されます。

明治二（一八六九）年、版籍奉還後、秩禄制改正によって不利となった稲田家臣たちは、蜂須賀氏が日和見主義に終始したのに対し、政府に要請して分藩を図った動きは注目に値します。この稲田家臣団の分藩独立運動に対して、本藩藩士たちはそれを藩主に対する反逆と捉え武力をもって阻止するに至った事件（庚午事変）が起こりました。ときに明治三（一八七〇）年五月十三日のことでした。

なお、この事件に関する水竹の心境については「八十帰脱始末書」（阿波郷土会編『庚午事変とその前後』）に述べられていますので、是非ご一読いただき、その思いの一端にふれていただければ幸いです。

今回の展示を通して、時代という大河の流れの中で、水竹が人間の生き方を説いてきたことに、自ら歩んできた道に、そして自らの生き方を模索し思考し続けた姿に学ぶべき点多々あると思われまします。言い換えれば「生きるとは何か」を現代に生きる私たちに問いかけているようでもあります。そのことは、跡継ぎ新居敦二郎に述べた遺言の一節にもうかがわれるのではないのでしょうか。「学問をして、教育者になれ」と。

最後になりましたが、今回の展示にあたり、史資料の提供及びご教示ご協力をいただきました大滝正理様をはじめ、大岩義雄様、八巻憲一郎様、武田誠夫・律様、川人ヒロ子様、祖上恭彦様、三木ガーデン歴史資料館そして三野町教育委員会の皆様方等には衷心よりお礼を申しあげます。

平成十七年二月一日

徳島県立文書館長 小笠 泰史

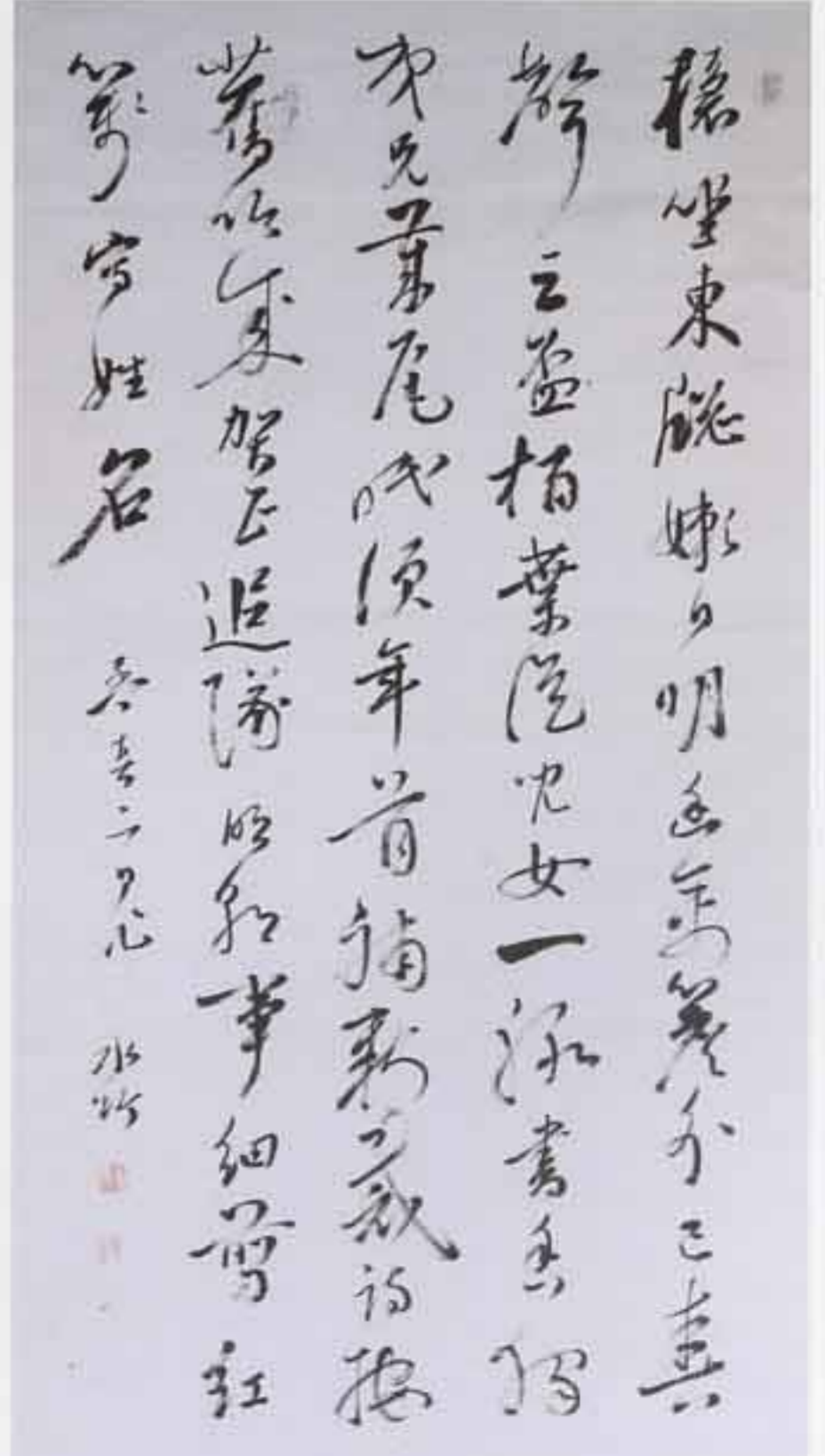
# 水竹と池田郷学校

文久三（一八六三）年十二月、新居水竹は三好郡池田の郷学校教授を命じられた。このとき同じように海部郡大里の郷学校教授を命じられた人物に増田龍頰がいる。増田家は宝永五（一七〇八）年に立軒が二〇〇石で仕官して以来の儒官の家である。龍頰は昌平黌で学び、水竹・中島錫胤らと徳島の藩論を尊王攘夷の方向に向けようとしたが、八月十八日の

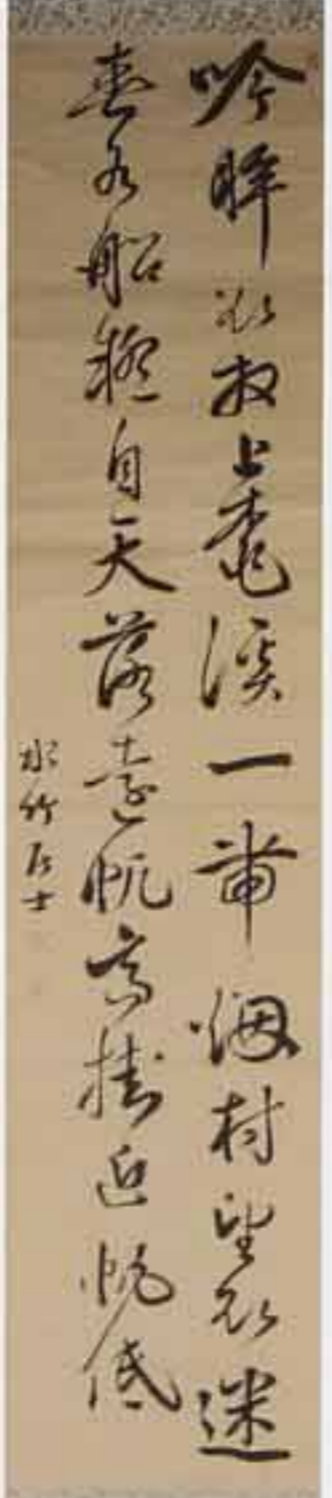
政変以降水竹と共に地方教授となつたのである。龍頰は赴任後慶応二（一八六六）年に大里で亡くなっている。徳島藩の地方学校である郷学校は、弘化三（一八四六）年藩主斉昌が海部郡代高木真蔵に命じて富岡（のち暇修館）・日和佐（のち尚美館）・大里の三ヶ所に置かれたという。大里郷学校は安政期に一時中断するが、龍頰によって再興された。

さて、「水竹日記」によれば水竹はほぼ一年病気による体調不良を理由に池田に赴任していない。慶応元（一八六五）年五月二二日池田の町に入っており、翌二三日に学校を見に行くが、学校の建物は茅葺きの建物で、修理をする必要があるものであった。池田の郷学校も水竹以前からあったものを再興したのかもしれない。二四日には、海部郡の人が来て、龍頰への書簡を託している。水竹は商人や吉野川を上下する船持ち、郡代所などを介して、藩士の日比野克己・弟子筋にあたる儒者柴秋邨・息子の敦二郎などとかなり書簡などやりとりをしており、自由な雰囲気があった。

池田郷学校での水竹の講義は、郡代とその子弟や郡役人、村役人層（池田のみならず三好郡内の広い地域の人水竹の元を訪れている。）やその子弟を中心に弟子をとり、さらに徳島から付いてきた弟子と共に行為



▲「穩坐東臆嫩日明 新居水竹書」大滝家文書軸（大滝家は、三好郡昼間村（現三好町）庄屋の家で「水竹日記」に立ち寄り、書を渡したことが記載されている。）



▲④「植嘉桐乎庭前 新居水竹書」大滝家文書 屏風（これは「嘉桐館」の扁額と関わりのあるものと思われる。）  
▲⑤「吟眸 新居水竹書」川人家文書軸（川人家は三好郡西山村（現池田町）の庄屋の家で、水竹日記に記載がある。）

れていた。寺島学問所に倣って時間割を作り、昼の講義と夜の講義があり、十二人ほどが集まったの講読の形式が中心であったようである。ときには垣の外で講義を聴く人々もあったと書いている。慶応元年の日記で、講読で使った教材は「小学」と「明倫通論」である。

この頃もずっと体調不良は続いてきたようで、慶応元年は七月三日に池田を離れ二ヶ月強（この年は閏五月を含んでいる）で徳島へ帰っていた。

慶応二年の日記は書かれていないのか残っていない。この年にも池田へ赴任しているかもしれないが、不明である。慶応三年には三月十四日から六月十一日の約三ヶ月、九月十三日から十二月二日までの二ヶ月半ほどの赴任をした。水竹の池田郷学校赴任は短期間であったかもしれないが、三好郡に残した教育の芽は決して小さいものではなかっただろう。

# 尊王攘夷運動と水竹

新居水竹は、弘化三（一八四六）年から明治三（一八七〇）年五月一日まで約二五年間で二三冊の詳細な日記を残しており、現在徳島文理大学の図書館に所蔵されている。この日記は、学事のみならず政治にも関わった徳島藩の儒者が残した資料であり、幕末における阿波の様子を知るためには一級の資料であるといえる。

安政四（一八五七）年水竹は、持病がひどくなり暇をもらい病氣回復のため京都へ向かった。この旅の様子は『塞馬録』に書かれており、竹



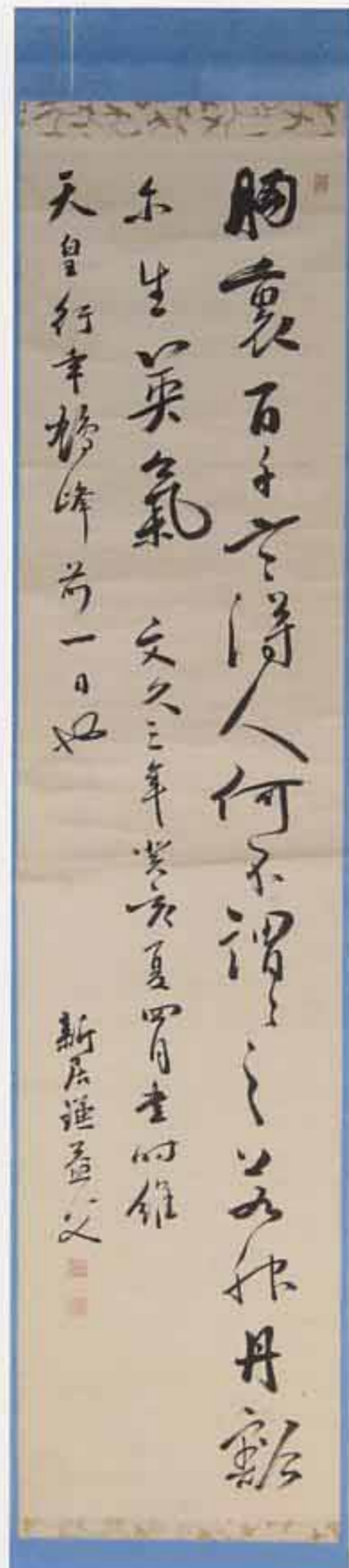
中島錫胤肖像 志摩家文書

治貞夫氏により徳島文理大学論叢に「新居水竹著『塞馬録』訳注」として訳と詳しい注釈が加えられている。竹治氏によれば「この持病は喘息で、五月から七月までの間約八〇日間の旅行であったこと。京都のみならず

伊勢まで足を伸ばし、多くの人と会っていること。その中には、藤井藍田・広瀬旭莊・長三洲・頼三樹三郎・家里松嶠・僧月性ら尊王攘夷派の人々が含まれ、後京都で勤王派として活躍する素地を作った。」としている。このうち頼三樹三郎は、翌年安政の大獄で捕らえられさらにその翌年処刑されている。

文久元（一八六一）年から江戸長久館の教授となっていた水竹は、藩命により同二年七月・九月・十一月・翌三年四月・七月の四度京都に入。当時の京都は、尊王攘夷派の志士と公武合体派がつけり合いをしている状況にあり、江戸に変わって京都が政治の舞台となった頃であっ

た。その中に入った水竹は、徳島藩主斉裕、世子茂韶の入京に先駆けて活動している。特に三度目までは、万延元（一八六〇）年の桜田門外の変にも関係していたとされる阿波出身の尊攘派の志士中島錫胤や藩に対して尊攘派としての献策を繰り返していた竹沢寛三郎らと緊密に会い、中島らを通じて長州藩や尊王攘夷派の公家などと会っていた。日記には、文久三年二月に中島らがおこし徳島に逃げ帰るきっかけとなった等持院足利木像梟首事件のことも書かれている。また同年四月十一日孝明天皇が攘夷祈願として石清水八幡宮に行幸した際にしたためた水竹の書（写真右）には、尊王攘夷派としての水竹の心情があらわれている。



▲⑤「導養神氣 頼春水書」大滝家文書 軸  
▲⑥「文久3年4月胸裏百千言 新居水竹書」徳島県立文書館蔵 軸  
〈解説〉  
胸裏百千言得人何不謂々之若神丹  
爾生英氣 文久三年癸亥夏四月昼時  
天皇行幸旭峰前一日也 新居謙益父

水竹は一端徳島に戻っていたが、文久三年六月徳島藩儒の中で公武合体派であった安芸田面が京都で暗殺されると、再び京都へ入って尊王攘夷派の人々と会っている。しかし、公武合体派によるクーデターである八月十八日の政変が起こると、翌日には阿波へ帰らされ、十二月には辺地教育強化の名目で三好郡池田村の教授を命じられた。水竹は、交友関係だけでなく儒学者として素朴に尊王攘夷の心情を持っていたようである。

# 庚午事変と水竹 (付・徳島藩士の始末)

水竹が、庚午事変に関係して東京白金の徳島藩邸で斬罪(切腹)に処せられたのはあまりにも有名であり、たくさんの研究書によりその経過は明らかにされている。ここでは、庚午事変前後の水竹の心情を示す資料等を紹介する。

●新居水竹が明治三年五月十四日(庚午事変・稲田騒動で徳島本藩側士族が分藩独立を企図する洲本稲田氏側を襲撃した日の翌日)に某氏に送ったとされる書簡より抜粋(水竹の二男・新居敦二郎の講演筆記より)

未曾有の国辱に堂々たる藩中、死を致し事をつとむる者これ無くてはなお是れ従前の惰藩弱兵にて、知事様平生文武の道を御躬行あそばされ御愛養の思食に戻り候故、固より死を分と致し出国仕り候。(中略)

かくまで不条理申しつり、剩へ、四方へ流言、遂に惰藩弱兵の嗤笑世に宣伝、御国辱、是より大なるはなし。乃ち知事様の御恥辱、臣子一日も安心せざるは藩士のみならず当路の人としても同じ事にこれあるべくここに論ずるに暇あらず候。

我藩、今日の形勢、往年のペリリに乗り込まれたる幕府同義たり。一を許せば二を乞ひ、二を許せば三を乞ふ。あくなき事終に今日の姿となれり。攘夷説を唱へ、是為落命の士少なからず。これ即ち日本魂にして士之本意也。

彼奸徒飽くなき事の欲を一々許せば、其末御本藩何処に置かんや、故に除奸の挙、今日の急務と存じ候。(中略) 死はもとより決心故、大法を犯し、願捨にて

脱歸仕り候八士愛国の志至誠より出で候故、聴者感動仕り候。

不都合の始末に於ては私一身に引受候事故厳刑は甘んじ罷在候。(下略)

●「八士脱歸始末書」にみる新居水竹の心境

明治三年四月二十七日、太政官より藩知事蜂須賀茂韶および稲田九郎兵衛邦植の両者は上京を命じられたが、すでに上京中の藩士大村純安(文学一等生・新居水竹塾頭)の「一同帰藩、知事上京の留守の間に稲田側の奸物を誅伐すべし」との意見に、上京中の若年藩士たちの大勢は同調した。指導者新居水竹、小倉富三郎はその決起を押し止めようとしたが、結局黙認するかたちとなって、八名の者の江戸脱走を許すこととなった。

五月七日、次の八名が脱走、江戸を出発して徳島に向かった。平瀬伊右衛門、藤岡次郎太夫、多田禎吾、滝直太郎、南堅夫、大村純安、小川錦司、三木寿三郎の八名である。いずれも二十歳を前後とする少壮気鋭の藩士であった。後にこの八名全員が太政官処罰により斬罪(特に切腹を許される)となった。左に掲げる一文は、脱走を黙認した新居水竹の心境



水竹墓所 徳島市西二軒屋 潮見寺

を伝えるものである。(阿波郷土会編「庚午事変とその前後」所収)

小倉と余は始より不同意なり。然れども志気の壮烈に感動して終に止め得ること能はず、其意に任せ候。其意に任せたるからは同盟の義乖くべきにあらず(中略)

余已に六十に近く、平生君子の道を説き、教授を職とせし身にてかくの如き瀟灑の徒と科を同うするは、全く学業の不熟より事に臨み、疑惑して思慮届かず、大事を誤り、知事様へ無量の御深憂、御奔走をまかけ奉、(中略)小倉は関係浅し。藤岡は全く脅徒なるべし。是等は他日上より御識別、あられたきことなり。

八士脱歸すと雖、兵は隊長の握る所故、適宜の処置、隊長にあるべし。殊に洲本にては奸の魁居合はざるに凶器を動かせしと聞く。いかなる訳にや。軽率妄動は兼々互に戒告し居たるに、いづれも斯くの如きに至る。返す返すも残念なり。(下略)

### ●小倉富三郎の除奸説大意

一、奸物アリテ藩律ヲ妨グ、藩律ハ即チ朝命ナリ、朝命ヲ妨グルモノ除カズンバアルベカラズ。斯ル者アリテ除ク能ワズ、是ヲ以テ怯弱ノ名ヲ取ル、是レ藩知事ノ恥ナリ。武門ニ於テ弱名ヲ取ル、恥是ヨリ大ナルハナシ。是故ニ死ヲ以テ知事ノ恥ヲ雪ガントス。是所謂君辱臣死スルノ義ナリ。(後略)

(徳島藩学館管事/槍術師範・小倉 富三郎 五十六歳：東京芝白金の藩邸で切腹)

### ●南 堅夫の辞世

いざさらば 二つの国の丈夫に 赤き ところを割りてしめさん



庚午志士の碑 (徳島市大滝山)

(銃士三番隊 二十二歳：助任万福寺で切腹)

●平瀬 伊右衛門(二十一歳) 須本牧民 従事：助任万福寺で切腹

●大村 純安(二十一歳) 文学一等生、新居水竹塾頭：右同

●多田 禎吾(二十三歳) 須本水利方奉 行：右同

●小川 錦司(二十四歳) 銃士四番隊：住吉蓮華寺で切腹

●三木 寿三郎(歳不詳) 銃士四番隊：右同

●藤岡 次郎太夫(二十五歳) 銃士二番隊、文学二等生：右同

●滝 直太郎(十八歳) 文学一等生、新居水竹門人：右同

その他 終身流罪二六人、流罪七年一人、禁固終身八人、同三年三二人、同二年半五人、謹慎四四人



庚午事変の志士(左から阿部興人・大村純安・南堅夫・益田永武) 祖上氏提供写真

# 水竹の石碑と交流

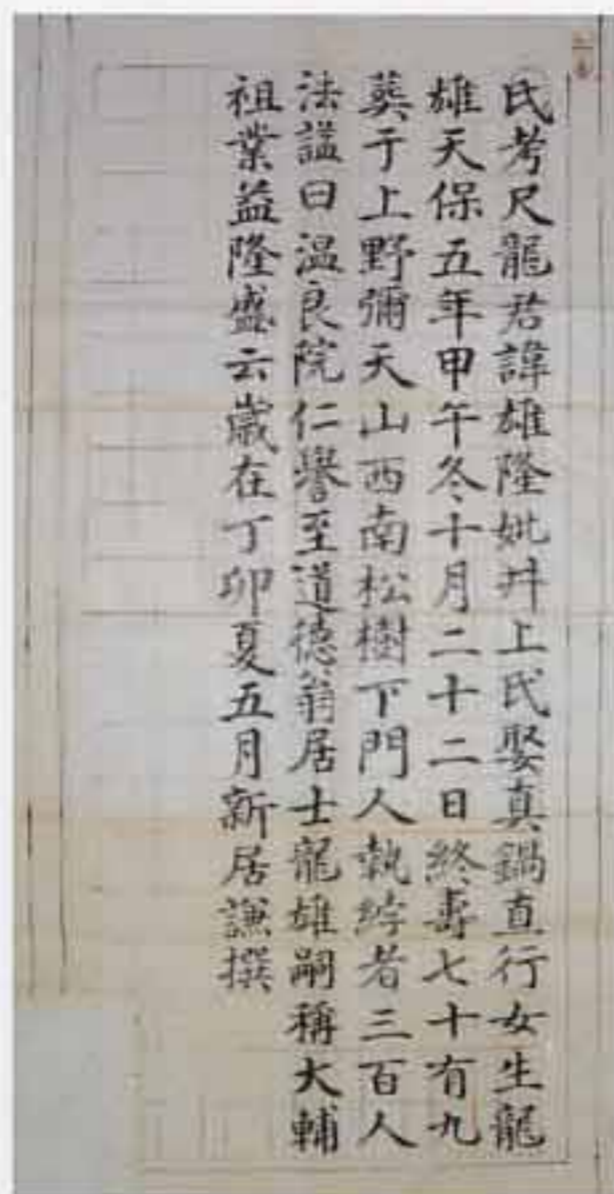
## ●武田家と水竹

美馬郡猪尻村（現脇町）にある武田家は、神全塾という私塾を営んで、稲田家家臣として八代旨助（尺龍先生）以降学問・武術などの教育にあたっていた。池田に赴任し行き来していた水竹は、特に池田へ下るとき、ほとんど脇町の吉田家へ立ち寄っており、水竹が池田に居たときに願って先祖九代宗作（応呼龍）および十代大輔（龍淵）の墓碑を撰文し書いてもらったものと思われる。武田家

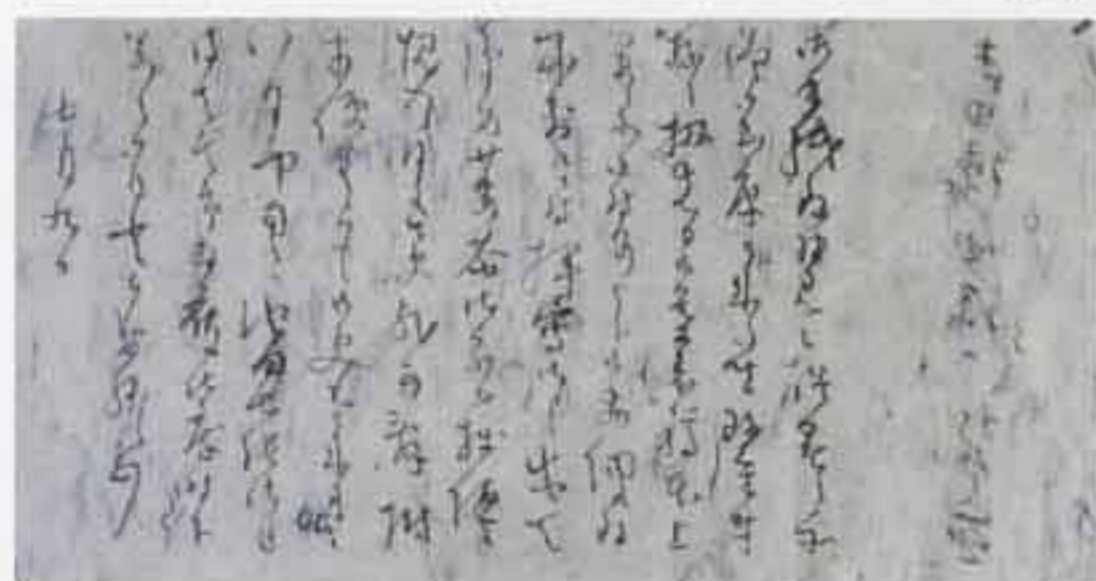
には十一代当主禎太郎（棟助）宛の水竹直筆の墓碑文の校正について書かれた書簡が慶応三（一八六七）年六月十七日と七月九日の二通残されている。手紙を出した頃は徳島にいた時期であり、八月の池田行きの時に完成したものを渡すとしている。また、武田家にはお礼としてであろうか、水竹に金三両を渡したというメモも残されている。儒者の活動の一端を知ることができる史料といえよう。



▲武田応呼龍墓碑



▲武田応呼龍墓碑新居水竹書脇町武田家文書



◀新居水竹書簡脇町武田家文書

## ●三野町三村用水（風呂谷用水）碑

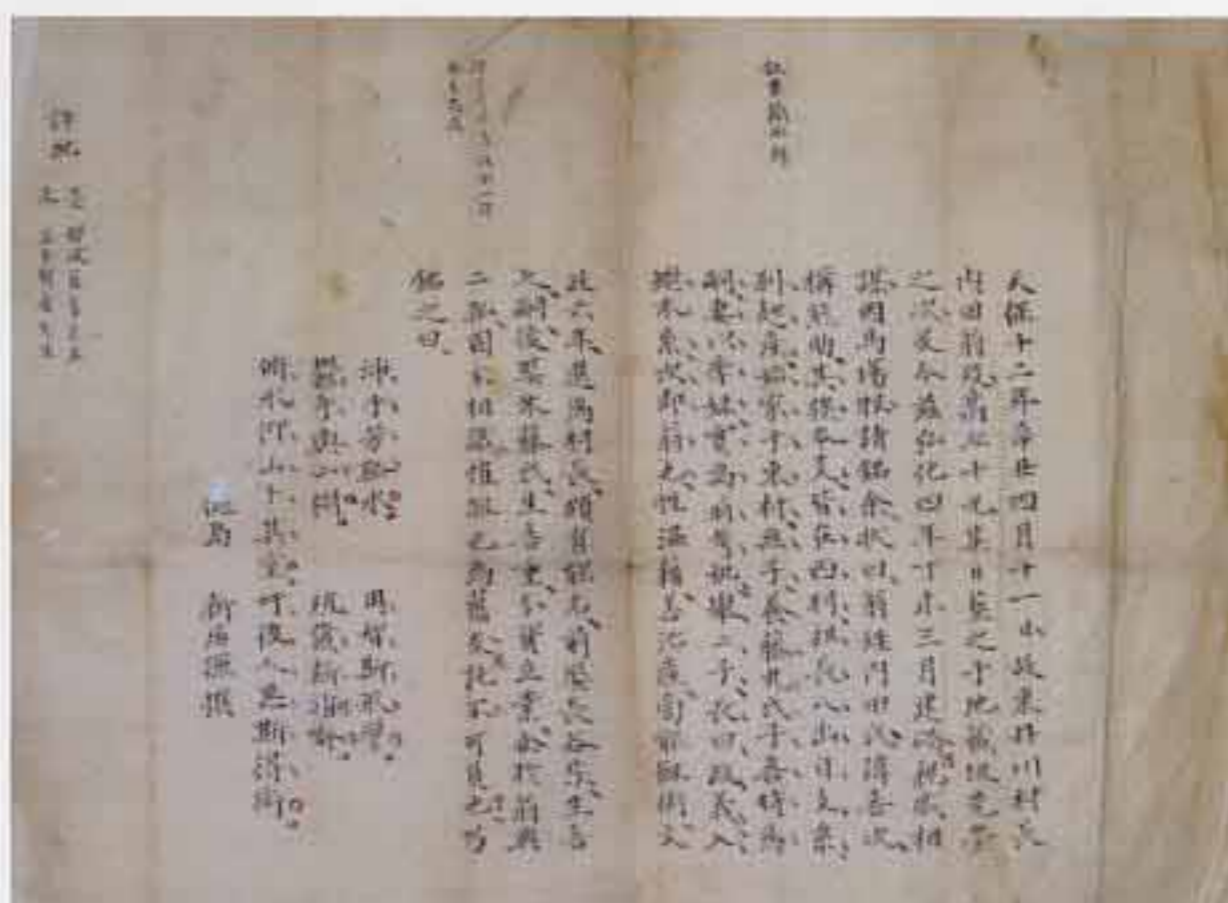


芝生・勢力・加茂宮（現三野町）三村は、吉野川の河岸で平地が広がっているが、谷が浅く大きな川がなかったため、水を引くのが大変難しかった。芝生村と太刀野村の間には河内谷川が流れており、ここから風呂谷の山々の下を洞門で抜き水を引く為の厳しい普請工事を記念して作成した碑である。文化年間の用水創設、文政年間の改修について書かれている。水竹は「水竹日記」にもあるように文久元年には現地を訪ね用水碑の撰文を行ったようだ。さらに文久四（一八六四）年に実際に建てるにあたって碑文の内容についてもめている様子が記されている。

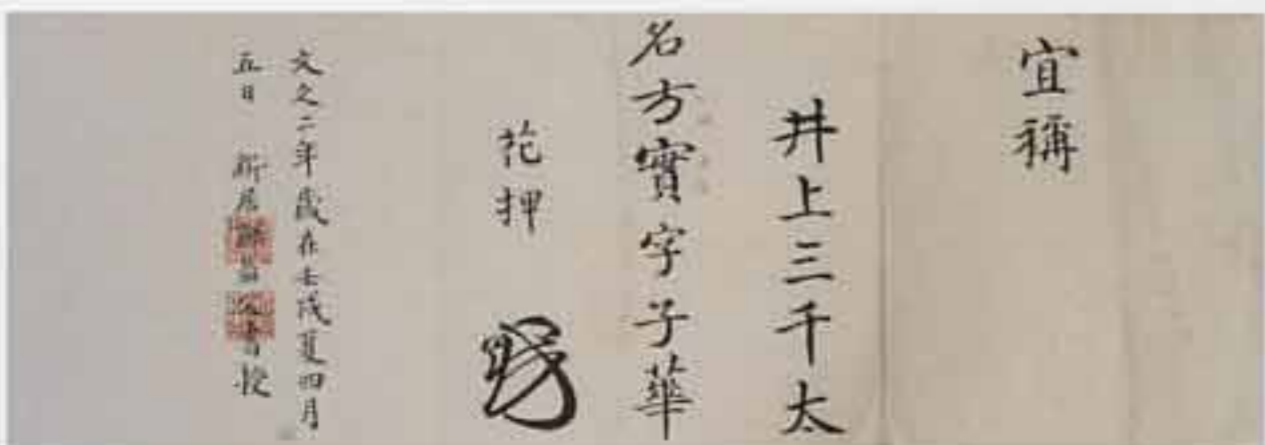
## ●馬場家文書 内田家墓碑

井川町の馬場家は、「水竹日記」の慶応元（一八六五）年五月に登場する家であるが、馬場家文書の中に東井川村の庄屋である内だけの墓碑文作成に関する資料が含まれていた。碑文は水竹が書いたものであるが、水竹の師である那波鶴峰・岩本贅庵の

二人に校正してもらっている様子がわかる。



## ●井上家文書



井上家は、小松島の商人で、幕末期を代表する阿波商人のひとつである。その当主井上三千太に文久二（一八六二）年、水竹が「方實（まさたね）」という名乗り、「子華」という字、および花押を与えたとき、花押を与えたとき、に作られたものである。

## 展示資料一覧

No.	表題	年代	備考
尊王攘夷と新居水竹			
1	新居水竹肖像写真		祖上氏提供
2	新居水竹書軸(胸裏百千言)	文久3年(1863)	徳島県立文書館所蔵
3	新居水竹書軸		三木ガーデン歴史資料館
4	頼春水書軸(瀧陽神気)		大滝家文書
5	中島錫胤肖像写真		志摩家文書
新居水竹と池田郷学校			
6	新居水竹書軸(御坐東)		大滝家文書
7	新居水竹書額(嘉桐館)		大滝家文書
8	新居水竹書外貼り混ぜ屏風		大滝家文書
9	新居水竹書(吟眸)		川人家文書
新居春洋			
10	日本当時書家競(写)	文政	ナカ00264
新居水竹の諸活動			
11	宣称(命名書 井上三千太)	文久2年(1862)	イノ03964
12	天保十二年(東井川村村長内田翁墓碑)	弘化4年(1847)	ハノ00229
13	武田応呼龍墓碑銘	慶応3年(1867)	脇町武田家文書
14	武田龍淵墓碑銘	慶応3年(1867)	脇町武田家文書
15	新居水竹書簡	慶応3年(1867)	脇町武田家文書
16	新居水竹書簡	慶応3年(1867)	脇町武田家文書
17	預申米之事(新居与一之助発起講銀借用証)	嘉永4年(1851)	イノ01920
18	遊山記(新居水竹メモ)	文政12年(1829)	ニノ00015
19	国尽(新居与一之助書手習手本)	(幕末期)	ムノ03466
20	水竹居詩抄巻上	明治19年(1886)	メノ00103
21	水竹居詩抄巻中	明治19年(1886)	メノ00104
22	水竹居詩抄巻下	明治19年(1886)	メノ00105
新居敦二郎			
23	新居敦二郎書(礼以節人)		徳島県立文書館
24	私立学校設立伺	明治14年(1881)	ニノ00004
25	東園歌集	明治24年(1891)	メノ00108
26	履歴書(新居敦二郎)	(明治37年)(1904)	ニノ00001
27	新居敦二郎書簡	(明治42年)(1909)	ムノ04310
28	古稀寿言四首(漢詩原稿)	(大正6年)(1917)	ニノ00011

※資料保存のため展示品の一部を替えることがあります。



新居水竹落款

編集・発行

徳島県立文書館

〒770-8070 徳島市八万町向寺山  
電話 〇八八(六六八)三七〇〇

印刷

ナカガワ・アト株

〒779-3603 徳島県美馬郡脇町大字猪原字若宮南三上  
電話 〇八八三(五二)一六四三